大阪商業大学学術情報リポジトリ

マルサスの思想形成と『人口論』への影響

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2018-05-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森岡, 邦泰, MORIOKA, Kuniyasu メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/496

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

マルサスの思想形成と『人口論』への影響

森　岡　邦　泰

1．はじめに
2．ローマ
3．ギリシャ
4．終わりに

1.はじめに

『人口論』、『経済学原理』の著者ロバート・マルサス（1766－1834）が主に父親ダニエルと交わした書簡が残っており（「親子書簡」と呼ばれる）、当時の学生の学習の様子をうかがうことができる。マルサスは、はじめクレイブズ塾で勉学し、その後1781年頃、父親が大学進学のためより進んだ教育を受けさせようと、ウォリントン学院（1754創立、1783年財政難で廃校）へ入学させた。ウォリントン学院廃校のあと、マルサスは同校の古典担当教師であったギルバート・ウェークフィールド（Gilbert Wakefield, 1756-1801）の私塾で学んだ。そこで夏の二ヶ月間を除き、寝食を共にする教育を受けた。当初塾生はマルサス一人であった。その後、ケンブリッジ大学のジーザスカレッジに入学した。1784年６月８日登録され、11月14日にクラス分けテスト、15日に力学の授業から受講が始まった。数学は１年上級のクラスに編入された。

書簡は卒業後のものも残っているが、ここでは大学までの勉学期間のものを見てみることにする。クレイブズ塾時代では、クレイブズが当時13～14歳だったマルサスの勉強の様子を父親宛に記した書簡で、

> マルサス君はラテン語の作文を始めましたが成績はかなりなものです。ただ不注意のせいで時々文法上の間違いを仕出かしますが。同君はホラティウスを終えましたが、１日当たり１～２編の頌歌を復習しています。またユウェナリスの『サトゥラ』５編を読みましたが、パトロンのテーブルで寄食者が受ける侮辱と屈辱をしみじみと歌い上げている第５編、あの第５編の人情の機微をこの年齢の少年が即座に理解しうるとは私には初めての経験でした。またそれと交互に同君はウェルギリウスの『農耕詩』を読んでいますが、これもウォートンの翻訳を用いつつまったく良く理解しているようです。
>
> 同君はキケロの『老年について』を読了し、午後にはサルスティウスの『ユグルタ戦記』を読み始めています。

英語で書かれた娯楽的な読書について申し上げますと同君は私の蔵書をほぼ読み尽くしました。同君は（年齢の割には）ローマ史の知識を相当に貯えています。…」
（1780年10月20日。Pullen and Parry［1997］6-7. 橋本［1987］293-294。なお訳文は一部変えてある。以下同じ。）

ウォリントン学院時代では、マルサスが父親に宛てた書簡で、

私たちは目下ユークリッドの第11編を勉強中です。来月末までに第12編を終了してしまっているでしょうし、そのころまでにはエンフィールド先生も哲学の講義を終了されることでしょう。その場合には、エンフィールド博士の予定だと、学年末まで商業論を数回講義して埋めて下さるそうです。古典の授業では私たちはロンギヌスとルクレティウスを交互に読んでいます。
（1783年４月26日。Pullen and Parry［1997］8. 橋本［1987］298。）

ウェークフィールド塾時代では、マルサスが父親に宛てた書簡で、

目下ツキディデスの葬送演説を読んでいます。彼の叙述は簡潔すぎて読み進めるのが難しいことを知りました。お茶の時間のあとホラティウスとキケロとを交互に読んでいます。ウェークフィールド先生は代数学と併行させて幾何学も多少勉強してアイザック・ニュートン卿の『プリンキピア』の一部を読む下準備をするよう指導して下さっています。
（1783年11月20日。Pullen and Parry［1997］11. 橋本［1987］301。）

ウェークフィールド塾時代の日課をマルサスは次のように記している。

午前　約２時間　　ギリシャ史
　　その後１時間　ユークリッドと代数学とを交互に
午後　１時間半［ずつ］　ギリシャ詩人（目下ソポクレス『ピロクテテス』、キケロ、詩歌を交替に）
お茶の時間後夕食時までウェルギリウスやホラティウス［の講読］か、キケロの文を参照したラテン語作文のどれかを交替に
（1784年１月14日。Pullen and Parry［1997］18. 橋本［1987］307。）

ケンブリッジ時代では、父親宛の書簡で、

代数学と流率法（微積分学）に関しては大した内容の講義をこれまでのところ受けていませんが、しかしそれら両学問についての相当な知識が無ければ自然哲学の諸分野とニュートンの『プリンキピア』とを読み進むのに読者は自分の理解力の大いなる欠如を思い知らされることでしょう。……私は来年の夏休み明けには完全にその科目を修得していることになります。

（1986年２月11日。Pullen and Parry ［1997］42．橋本［1987］327。）

講義は明日から始まります。先週多少の暇を得て数学の復習をしていましたので、昨日のテストにより１年上級のクラスでの受講資格ありと認定されました。……マクローリンの『ニュートン』とキールの『物理学』との中の力学から私たちはスタートします。

さらに、月曜日と金曜日にはダンカンの『論理学』の講義が、そして水曜日と土曜日にはタキトゥスの『アグリコラ伝』の講義があります。

（1784年11月14日。Pullen and Parry ［1997］313．橋本［1987］313。）

勉学の主眼は数学におかれています。と言いますのも学士号取得時の栄冠はすべて数学により決まるからです。ですから大半の学生の大目標は栄冠付き学士号を取得することに置かれています」

（1784年11月14日。Pullen and Parry ［1997］28．橋本［1987］313。）

このようにマルサスの勉学では、西洋古典と数学の勉強が目立つ。西洋古典の勉強は西洋の伝統的教育であったから、当然ともいえるが、牧師になることを目指していたマルサスが数学に情熱を傾けていたのは意外な感じがする。大学では数学で学士号取得時の栄冠が決まる雰囲気だったという。しかもケンブリッジ時代よりも前からかなり数学を勉強している。

数学については別のところで触れたこともあるので（森岡［2007］）、ここでは西洋古典に着目してみよう。Ｊ・Ｓ・ミルが自伝で、3歳でギリシャ語を勉強しはじめ、子供時代に名だたる西洋古典を片っ端から読破したことを述べているが、マルサスもミルのような英才教育は受けていないものの、かなりの時間を西洋古典の勉強に費やしている。それは『人口論』を執筆する上で、どのように役立ったのだろうか。本稿はマルサスの西洋古典の読みを検討してみる。

２．ローマ

マルサスは初版『人口論』のあと、さまざまな資料を渉猟して、『人口論』の主張を実証しようとした第２版を上梓し、以後、その線に沿って人口論を改訂し続けた。そこで本稿では、最終形態である第６版をもとに、マルサスが西洋古典をどう読んだのかを検討してみる。

マルサスが西洋古典を典拠としているのは、主に第1編の第13章のギリシャと第14章のローマである。ここでマルサスはほかの章と同様に、自らの人口原理がどのように働いているのかを解明しようとした。特に第14章では、ウォーレスとヒュームの人口論争に論評を加えている。そこでまず第14章を見てみることにする。

第14章でマルサスが西洋古典を最初に資料として用いたのは、ウォーレスを引用して「当時のイタリア人の歴史を精査してみると、イタリアが完全に制圧されるまでの絶え間ない戦争に従事した莫大な人数がどのようにして集められたのかに驚かざるをえない（Wallace

［1753（1992)］63）と述べたあと、リウィウスも同様なことを言っていると、リウィウスに言及したところである。それまでウォーレスは、『古代近代の人口』でイタリアの人口について、ロムルスの時代から順に時代を下って、ハリカルナッソスのデュオニシオスとリウィウスを用いて述べてきていて、そして上記の文言を記したのであるが（Wallace［1753（1992)］59-62)、マルサスはそこには反応しなかった。

マルサスのリウィウスへの言及箇所は次の通りである。「そしてリウィウスも、ウォルスキー族やアエクイー族が、あれほど頻繁に征服されながら、新たな軍隊を戦場に送り出すことができたことに大変な驚きを示した」（Malthus［1986］Vol.2, 146. 訳171)。これはウォーレスが上の引用箇所に続いて述べているものと同じ趣旨である。実際ウォーレスは次のように述べていた。「ローマは強大な都市となった。しかしその偉大さが、他の都市に引き起こした破壊と荒廃に釣り合うことができたのか疑問になるだろう。／そうすることができなかったことは大いにありそうなことである。この点でリウィウスは判断を下している。リウィウスはウォルスキー族とアエクイー族の軍隊の強大さを述べて、それを次のように説明している。『その地には無数の自由民の群衆がいた。後には奴隷だけになってしまい、兵士の小さな苗床があるだけである』」（Wallace［1753（1992)］62-63）と。ウォーレスはこの引用でローマ市の話を打ち切り、直ちにシチリアへと筆を進める。

ウォーレスはリウィウスの該当箇所を注で原文で挙げている[1)]。マルサスもリウィウスの同じ箇所を注で典拠として挙げている。従ってこの部分は、ウォーレスからの孫引きに近い記述である。しかしリウィウスのまったく同じ箇所をモンテスキューも引用しているので、モンテスキューから彼らがこの記述の存在を知ったのかもしれない（Montesquieu［1990］111-112. 訳365)。ヒュームの「古代人口論」には上記のような記述はないので、マルサスはここではヒュームではなくウォーレスに依拠していることがわかる。

マルサスがそれまでのウォーレスの叙述をやり過ごしてきて、急にここで反応を示したのは、人口の増加速度と関連した記述だからだろうと思われる。自らの人口原理と関連しているからである。

マルサスはここで次のようにコメントしている。「戦争によって人口が絶えず減少したため、人口増殖力をほとんど最大限にする習慣が生まれていたのであって、そのため、誕生した健康な子供が成人し武器を取るのに適するまで成長する比率が、状況の異なるほかの国で通常そうなるよりも、ずっと高くなっていたという、きわめてありそうな事態を仮定するなら、リウィウスとウォーレスの驚きはおそらく十分説明されるだろう」と（Malthus［1986］Vol.2, 146. 訳171)。

ここにウォーレスとマルサスのリウィウスの読み方の違いが現れている。まず先に注1で

1）「私が……不思議に思ったこと、かくもしばしば敗北を被ったウォルスキやアエクィに、いったいどこから充分な数の兵士が現われたのかという疑問が、きっと浮かぶことであろう。……ありそうなのは、現在ローマ軍の徴募で見られるように、戦争と戦争の合間に常に別の世代の若者たちが育ち、戦争を再開する目的でその都度新しい世代の若者たちを用いたこと、あるいは、常に同じ部族（ゲーンス）が戦争を起こしたのだが、常に同じ国民（ポプルス）から軍隊が徴募されたわけではなかったのか、あるいは、今では兵士たちを育む狭隘な苗床もほとんど残らず、ローマの奴隷たちがなんとか荒廃をくい止めているあの土地に、無数の自由民がいたのだろう。」（Livy［1924］234. 訳28)。この邦訳とウォーレスによる英訳が微妙に違っているが、原文はどちらにも訳しうる（Livy［1924］234)。

挙げたリウィウスの文章を見ると、リウィウスは3つの理由を推定している。①戦間期に人口が自然に増えた、②別の国民（ポプルス）から徴募した、③かつてはもっと自由民が多かった。マルサスはこの①の線に従っているが、リウィウスと違って、ウォルスキー族やアエクイー族ではほかの国とは異なり、人口増殖力が最大限になっていたと考えている。これはマルサスの人口原理から出てくることである。人口増殖力は一定ではなく、潜在的には等比数列的に増加するきわめて大きな力をもっているが、3つの制限によってそれが抑制されていると見ている。特に第3の道徳的妨げは、そのときの状況によって人間が自由に変えられるものだから、人口増殖力は可変的なのである。リウィウスはそれを一定と見ているから、ほかに②や③の理由を考案せざるを得なかった。

一方ウォーレスは、マルサスと同様に潜在的な人口増殖力がいかに大きいのかを認識しており、そのことを示す表を、『古代近代の人口』の冒頭で掲げていた（Wallace［1753（1992)］4)。そしてそれが実際にはさまざまな事情で発揮されないことがあることも認識していた[2)]。しかしウォーレスはリウィウスが挙げた3つ理由のうち、①と②には反応せず、③だけにおそらく賛同して、その部分の英訳を載せた。それが前述の「その地には無数の自由民の群衆がいた。後には奴隷だけになってしまい、兵士の小さな苗床があるだけである」のところである。つまり③は、古代の方が人口が多かったことを示唆するものである。これはウォーレスの主張と一致するものである。つまりウォーレスは、自らの主張と一致する記述をリウィウスに見出して、それを英訳して載せたが、論理的にはマルサス同様導くことができたはずの①の理由は黙殺した。

次にマルサスは嬰児殺しの習慣がイタリアにおいても行われていたことを述べる。しかしこれは、戦争による人口減少が、次世代のための余地を作り出すのに十分でなければ、当然行われなかった、という（Malthus.［1986］ Vol.2, 146. 訳172)。これはマルサスの人口原理の応用例である。つまり人口はそれを受け入れる余地が社会にある限り、可能な限り増えるのである。

マルサスは、以前はローマの版図で広まっていた土地の等しい所有が、次第に損なわれて少数の大地主の手に落ちてしまったため、貧民が飢え死にすることを避けるには、近代国家と同様、富裕者に自らの労働を売る以外に生計を維持する手段がなくなったこと、しかるに多くの奴隷が農業と製造業に使われたため、この生計を立てる途が奪われてしまったことを原因としている（Malthus［1986］ Vol.2, 147. 訳172-173)。ウォーレスも暗黙のうちに、食糧の供給量が人口を規制していると考えていたふしもある。ウォーレスによれば土地の均等な分割がなされていれば、商業が未発達でも人口増加に有利である。土地が不均等に分割されていても、それを耕す人々を養う以上の物を生産できれば、人口は十分あるし、農業労働者を養う以上の余剰分は、学芸を担う人々に割り当てられる、という（Wallace［1753（1992)］17)。商工業は食糧を生産しないので（輸入すれば別だが、地球規模で考えれば全体としては同じことになる)、農業に特定の社会状況（たとえば土地の所有状況）や習慣がどれほど有利か不利か、それによりどれだけの人口を扶養できるか、という観点から論じら

2）自然的原因と社会的原因。大きいのは社会的原因で、それは戦争、貧困、世俗および宗教界における腐敗した制度、不節制、怠惰、奢侈、そのほか結婚を妨げたり生殖力を弱めたりする一切のもの（Wallace［1753(1992)］13)。

れる。奢侈産業は食べ物を生産しないので、奢侈産業に労働力が多く振り向けられた近代は人口増加に不利だと論じたのである。これは食糧の生産量が人口の上限を画していると前提して始めて成り立つ議論である。永井のいうようにウォーレスには食糧増加率についての認識はないので（永井［2003］136)、そこがマルサスと違うところであるが、食糧の供給量が人口を規定するという考えは、マルサスの人口原理と通じている。この考えをマルサスは救貧税についての議論にも使っていた。すなわち食糧生産量に限界がある以上、救貧税のせいでより怠惰な者が食糧に与り、その代わり勤勉な者が押し出されるという議論である。また、ケインズが『人物評伝』の中で、第2版『人口論』の中で最も偉大な節といって引用をしたところも、その労働が社会のニーズに応えられないため、限られた食糧に与る資格がない者が必然的に生じることを断言したところであるが、ここも食糧の供給量が人口を規定するという同じ考えに立っている[3)]。

マルサスは、土地が一部の者に集中したため、生計の途を奪われた市民たちは、莫大な穀物を貧しい市民に配るというばかげた習慣がなければ、生存できなかったであろうとし、しかしその量は1家族分としては不十分で、1人分としては多すぎた、と述べた。ここのいわゆるパンとサーカスの政策のうちの、穀物の配給量が1家族分として不足し、1個人には多すぎるというところは、マルサスが典拠を示しているように、ヒュームの「古代人口論」の中の見解の1つをそのまま採用したものであるが、この引用は、逆にマルサスとヒュームの関心の違いを如実に表している。

ヒュームの「古代人口論」の基底にあるのは、古代社会の野蛮さと残酷さに対する嫌悪と近代社会への信頼である。古代近代論争の人口版とでもいうべきウォーレス＝ヒューム人口論争で[4)]、ヒュームがこの問題に多大な精力と時間を割く動機を与えたのも（この問題に関連する文言を、膨大な西洋古典の著作から探すのは容易なことではない)、古代を称揚しようとするウォーレスの議論に我慢ができなかったからだろう。ヒュームが「古代人口論」でいいたかったことは、古代では「戦争は、よりいっそう血なまぐさくて破滅的であり、その政府は、よりいっそう党争的で不安定であり、商業と手工業は、もっと貧弱で不活発であ

3）ケインズはこの一節の引用を思いとどまることができないといって、次のごとく長々と引用した。よほどケインズのいいたいことを代弁していたのだと思われる。「すでに占有された世界に生まれた人間は、もし彼が正当な要求を有する両親から養ってもらえないならば、また、もし社会が彼の労働を欲しないならば、食物の最小部分に対してさえもこれを権利として要求する資格はなく、また事実上、彼が現にいる場所になにもいるいわれはないのである。……」（keynes［1972］90、訳122)。

4）この論争は明らかに古代近代論争の枠組みの中にある。「新旧論争」の項目参照（ウィーナー［1990］)。この論争はこの「新旧論争」で述べられているように、フランスに限ったことではなく、イギリスでも行われた。この項目では文学が主に述べられ、社会問題についての言及はないが、ウォーレス＝ヒューム人口論争も、その中に含めて考えるのが適当だと思われる。なぜならこの論争の基底にあるのは、17世紀以降、西ヨーロッパ諸国がさまざまな分野で発展を遂げる中、それまで模範とし、師と仰いできた古典古代よりも、近代の方がすぐれているのではないかという意識だからである。中世人は、世界に何も新しいものはない、新しく見えるものがあるとしても、それはかつて知られていたものが忘れられて、再発見されたに過ぎないと考えていた。まさに「法は新たに創られることはなく、『探究され』そして『発見される』のである」（グレーヴィチ［1999］243)。しかし近代になって西洋はそれまでのいかなる社会も知らなかった種々の発見をした。『ルイ大王の世紀』を発表してこの論争の口火を切ったペローは、その詩で望遠鏡や顕微鏡をうたいあげた。ヒュームもやはり、近代は古代が知らなかった高度の商業社会であり、非人道的な奴隷制も後退し、習俗も温和になった文明社会であると信じた。ウォーレスとヒュームは、古代と近代とどちらがすぐれているかという問題を、人口を素材に論じたにすぎない。ウォーレスにおいては、永井のいうような政策的課題が背景にあったかもしれないが（永井［2003］136)、ヒュームは文明の問題としてとらえているので、古代近代論争の枠組みに入る。

り、そして、治安全般は、もっとしまりがなくて不正規」（Hume ［1987］421. 訳89）であり、何よりも非人道的な奴隷制度が社会全体を覆っていたのであって、それを考慮すれば、人口が近代より多かったはずはない、ということだった。しかし古代近代論争に関心のないマルサスには、自らの人口の原理がどう貫徹しているかを示すことに関心がある。そこで、古代の市民への食糧供給量に関係する無償の穀物配給の量だけに反応を示したのである。

次にマルサスが西洋古典に言及するのは、プルタルコスが、貧民の間の子供の遺棄について語り口から、三子法にも拘わらず[5]、多くの子供が遺棄されたと信ずべき大きな理由があると述べたところで、プルタルコスの『子供への情愛について』を典拠として挙げているが（Malthus ［1986］ Vol.2. 147. 訳173）、同書で直接貧民の子供の養育について言及している箇所は、貧民は自分の子供が「その素質にふさわしい育て方より悪く育てられて、奴隷根性の、無教養で、あらゆる美徳を欠いた人間になりはしないかと恐れて、子供たちを自分で育てようとはしない――つまり、彼らは貧乏を悪の極致と考えているため、まるで厄介な大病と同じように、子供たちを貧乏にかかずらわせるのに我慢がならない……（テキスト欠如）」（Plutarch ［1939］356、訳215-216。）というところである[6]。これは直接遺棄について述べているわけではない。しかしそうとも解釈できる余地はある。タキツスの『ゲルマニア』も同じ結論に達しているようであるという（Malthus ［1986］ Vol.2,147.訳173）。確かに同書はそのように読むことも可能である[7]。

その次に西洋古典に言及するのは、上流社会で人口の増加を制限する悪習がはびこっていたと述べるところで、その典拠としてユウェナリスの次の詩句を引用する。「だが、金持ちの黄金ずくめのベッドには、ほとんどいかなる産婦も横たわることがない。子を作らせずに、人間を胎（はら）の中で殺すことに力をかす堕（おろ）し稼業の技術にはそれほどの力があり、（堕胎の）飲み薬にもそれほどの力があるのだ。」（Juvenal ［1940］132. 訳123）。現代のローマ史研究のサーベイにおいても、上流社会では避妊や堕胎が横行していたとされ、その例証としてユウェナリスの上の詩句が引用されることがあるので（長谷川岳男・樋脇博敏［2004］249）、マルサスのこの引用は妥当だと思われる。

次の言及は、メテルス・ヌミディクスの演説を憤激と嫌悪の情を隠して読むことはできない、といって、全文引用するくだりで（Malthus ［1986］ Vol.2,149. 訳174-175、原注10）、この演説を道徳的腐敗がローマで進行していたことの証としている。実はこの演説は習俗が腐敗していた例証としてモンテスキューが『法の精神』で引用したものだから（Montesquieu ［1990］113. 訳367-368）、マルサスはモンテスキューを通してこの演説の存在を知ったのであろう。引用の趣旨もモンテスキューと同じである。

このあとマルサスは、奴隷制が人口にどういう影響を与えるかというウォーレスとヒュームの議論に論評し、それを否定的に見るヒュームに与しているが、その理由がヒュームとは

5）子供が3人以下の者に対する相続権や特権の制限を定めた法。3人以上子供を持つ父親は相続において優位を保証され、行政官や属州総督などの候補者の中で、独身者や子供がいない者より優先されるという特権が与えられた（プルタルコス［2000］203、訳者注）。

6）同じ箇所をヒュームも『古代人口論』の注59で挙げている（Hume ［1987］399. 訳66）。

7）「子供の数を制限したり、あるいは、相続人以外の子供を一人でも殺すことは、恥ずべき行為と考えている。かの地では醇風美俗が、他のところで立派な法律が持っている以上の威力を発揮しているのである」（Tacitus ［1970］160. 訳52、第19節）。

少し違う。ヒュームの場合、奴隷は原則子孫を残さないと考え、その非人道性が人口増加の妨げになっていたと考えた。しかるにマルサスにあっては、奴隷を絶えず流入させることほど、人口増加の妨げになるものはない、という。その理由は、奴隷労働が導入されると、その分自由民に対する労働需要が減り、自由民は生計の途を奪われるからである。人口原理によれば、生活資料の限界まで人口は増える可能性があるが、労働需要が減って収入が減少して生活資料が減れば、それに応じて人口も減少する。つまりヒュームはあくまで文明観の観点から、奴隷制を否定的にとらえ、それが人口増加にも不利に働くことを示そうとしたが、マルサスはあくまで人口原理と経済的観点から論じているのである。マルサスは奴隷を家畜にたとえたウォーレスとヒュームの議論についても言及し、やはりヒュームに軍配を上げているが、マルサスが奴隷を家畜にたとえるやり方を借用する必要があるといったのも（Malthus［1986］ Vol.2, 150、訳177)、それが主人にとって奴隷を繁殖させるのが有利かどうかという経済的観点からの考察だからである。マルサスはこの問題ではヒュームを支持しているとはいえ、ヒュームのように奴隷制の非人道性とか、古代社会の野蛮さと残酷さとかいうものは興味を示さない。ヒュームを引用している他の箇所も、たとえばそれが食糧の供給に関する考察だから[8)]、というように純粋に人口原理に関係しているからである。奴隷制のある古代においても、もし奴隷の供給が受け入れる国の労働需要に比例するなら、人口問題は、近代国家と同じ基盤に立ち、人口はその国が雇用し扶養できる人数になる。従ってその国の人口は土地の産出する食物に常に比例する。この点が人口論争において、十分注意されてこなかったという。つまりウォーレスもヒュームもそれぞれ人口増加に有利であるか不利であるかの自然的および社会的原因が持ち出すだけで、どちらの側にも有利な正しい結論を引きだすことができなかった、という。それは、この根本的な人口原理を理解していなかったからだ（Malthus［1986］ Vol.2, 151-152. 訳178)、というのがマルサスのいいたいことであった。

続いてのマルサスの評言も同じ趣旨である。つまりウォーレス＝ヒューム人口論争では、天然痘や古代人の知らなかった他の疾病が人口の多寡を論じる際の根拠の一つになっており、両者とも重要視しているが、当時緩慢な食糧の生産の増加率に人口を押さえ込むため、多くの制限が作用しなければならなかったのだから、疾病で減少しても、その分人口の制限が必要となくなりすぐ増加するので、この事情はあまり意味がないというのである（Malthus［1986］ Vol.2, 152. 訳179)。そのあとの近代国家の独身にとどまる下男、下女に関するヒュームの議論への批判も同様に、人口原理から出てくるものである。

このようにマルサスのウォーレスとヒュームへの批判は基本的に、人口原理を理解していないことに向けられている。人口が潜在的には急速に増大するものであることを、ウォーレスもヒュームも理解していた。ウォーレスは『古代近代の人口』の冒頭で、人口の増大速度について、人口は33か3分の1で倍になり、100年で8倍になると主張し、増加の一覧表を作っていた。またヒュームも「貧乏貧窮が人々の生殖力に加えているあの制限をはずされ、もしも、それが十二分に発揮されようものなら、各世代ごとに人口は倍加する」（Hume

8）原注の13と14（Malthus［1986］ Vol.2,149. 訳176)。原注の13だけ記しておけば、「以前は穀物を輸出していたイタリアが日々のパンを全属州に仰ぐようになったとローマの著述家たちが嘆くとき、彼らはこの変化の原因を住民の増加にではなく、耕作と農業の軽視に帰した。」

［1987］401. 訳68）といっていた。しかし、両者とも人口原理のもう一端、人口は生存資料によって規定されるということを理解していなかった、というのがマルサスの批判の要点である[9)]。

3．ギリシャ

ギリシャについての叙述は、ローマとは様相を異にする。ここでマルサスは、プラトンとアリストテレスがいかに人口原理を熟知してしたかを証明しようとする。ローマを扱った第14章では、典拠とされた西洋古典は、モンテスキューとかウォーレスとかいった先人がすでに挙げたものが多かった。おそらくマルサスは、先人の著作から、当該主題に関係する西洋古典の文言を知ることができたのであろう。しかしマルサスはギリシャでは、ほとんどプラトンとアリストテレスのみを取り上げている。反対にウォーレスやヒュームはプラトンやアリストテレスに言及するところはあまり多くない。ウォーレスの目的は実際に古代の人口を割り出し、それを近代と比較することだったが、プラトンやアリストテレスはその情報をあまり与えてくれないからである。ヒュームはウォーレスのように具体的に古代の人口を算出することには慎重で（古典作家の与える数字には信用できないものがあるから）、古代と近代の文明の比較から人口を論じようとした。たとえば奴隷に対する人々の生活態度から奴隷制の人口に対する影響を考察した。そこで必要となるのは、人々の実際の生活態度や心性であり、いわば社会史的な情報であるが、プラトンもアリストテレスもそういう情報をあまり与えてくれないからである。

おそらくマルサスは、第14章とは違い、テキストの選択において先人の論述に頼らず、自分の読書経験から選んだ。プラトンとアリストテレスは、大学までの親子書簡にたまたまその名が出てこないが、西洋古典の王道であり、特に社会問題に関心を持つものにとっては避けて通れない古典である。ここでマルサスが学校時代に受けた古典学習が生かされたと思われる。そのことを示すかのように、アリストテレスの著作を要約したところにつけた原注６で、マルサスは、原文を調べる労をいとう読者のために、Gillies 英訳のページ数を示した。そして彼の訳は自由訳であったので、一部の章句は完全に省略され、また一部には文字通りの意味を与えていない、と述べた（Malthus ［1986］ Vol.2, 143. 訳168）。これはギリシャ語原文を読みうる者だけがいいうる言葉である。

マルサスはプラトンとアリストテレスが、生活資料の生産を超える人類の強大な増殖傾向とそれを妨げる制限が不可避となっていることを、つまり人口原理を知っていたことをプラトンの『法律』と『国家』、およびアリストテレスの『政治学』から示そうとする。『法律』も『国家』も現実の国家を描いたものではなく、架空の理想国家を描いたものである。だからウォーレスもヒュームもこれらを主な典拠として議論を展開することができなかった。しかしマルサスは、プラトンが『法律』で、理想のポリスの市民の数を5040とし、人口がこの数で維持されるよう、足りなければ奨励し、多すぎれば抑制するよう国家が働きかけること

9）しかし前述のように、ウォーレスにはこのことを暗黙の前提としていたふしがある。

から、プラトンが人口は生活資料を超えて増加する傾向を十分知っていたとする。（Malthus［1986］Vol.2, 142. 訳166-167）。つまり人口原理を知っていたとする。このようにマルサスは、現実の古代ギリシャ社会の人口の状況を述べようとはせず、プラトンが人口原理を知っていたかどうかのみを述べるのである。

アリストテレスについても同様である。マルサスによれば、アリストテレスは、プラトンが財産と人口の関係を十分考慮しなかった点を論難しているとする。子供の数を制限せずに財産を平等化するという矛盾を犯したと。またアリストテレスは、カルケドンのファレアスについて語っているところで、再度プラトンの財産の規定に言及し、財産をそのように規定するものは、同時に子供の数も制限しなければならないことを知るべきだと述べていると。なぜなら子供が扶養できる資料を超えて増加すれば、法は必ず破られ、家族はたちまち乞食に落ち込むからである。マルサスは以上から、アリストテレスは、明らかに、人類の増殖傾向が厳格な実定法によって妨げられなければ、財産の平等に基礎をおくあらゆる制度にとって絶対的に致命的であったことを知っていたとする（Malthus［1986］Vol.2,143-144. 訳169）。このようにプラトンとアリストテレスが、人口原理を知っていたことを例証することに、ほとんど第13章は費やされている。

アリストテレスのところで、マルサスが財産についての記述に敏感に反応したのは、ゴドウィンやコンドルセに反発して、初版を書いて以来、ずっとマルサスの根本主張と関係しているからだと思われる。

4．終わりに

以上、マルサスの西洋古典の扱いを見てきた。それは第1編の各章で、世界各地、古代から近代に至るまで、人口原理の貫徹の状況を描いてきた一コマとして出てきたに過ぎない。マルサスは南洋諸島やアメリカインディアンの人口の状況を論じるために用いた航海記やさまざまな書物と同じ資格で、ギリシャ、ローマの人口問題の資料として西洋古典を使っている。その意味で、比重は必ずしも大きくはない。しかしその扱いを見ると、マルサス特有の問題関心から解釈を施していることがわかる。その意味で、マルサスの西洋古典の読解を検討することは、マルサスの見方をより明らかにするのに役立つものと思われる。

参考文献

Athenaeus [2008] *Athenaeus : The Learned Banqueters,* Loeb Classical Library, Harvard University Press. アテナイオス［1998］『食卓の賢人たち2』柳沼重剛訳、京都大学学術出版会。

Dionysius of Halicarnassus [1937] *Dionysius of Halicarnassus,: Roman Antiquities,* Loeb Classical Library, Harvard University Press.

Hume, David [1987] *Essays Moral Political and Literary,* Liberty Fund. ヒューム［1952］『市民の国について』（上）、小松茂夫訳、岩波文庫。

Juvenal [1940] *Juvenal and Persius,* Loeb Classical Library, Harvard University Press. ユウェナー

リス［1995］『ユウェナーリス　サトゥラェ――諷刺詩』藤井昇訳、日中出版。

Keynes, John Maynard [1972] *The Collected Writings of John Maynard Keynes,* Vol.X. Essays in Biography, Macmillan. ケインズ［1980］『ケインズ全集10　人物評伝』東洋経済新報社。

Livy [1924] *Livy Ⅲ : History of Rome,* Books 5-7, Loeb Classical Library, Harvard University Press. リウィウス［2008］『ローマ建国以来の歴史３』毛利晶訳、京都大学学術出版会。

Malthus, T. R. [1986] *The Works of Thomas Robert Malthus,* Vol. 1 ～ 8, Pickering. マルサス［1973］永井義雄訳『人口論』中公文庫。マルサス［1985］『マルサス　人口の原理［第６版］』大淵寛ほか訳、中央大学出版部。第６版は大淵寛ほか訳を使用。なお訳文は必ずしも邦訳に従っていない。

Montesquieu [1990] *De l'esprit des lois II,* Garnier, Paris. モンテスキュー［1989］『法の精神　中』野田良之ほか訳、岩波書店。

Plutarch [1924] *Lives I : Theseus and Romulus, Lycurgus and Numa, Solon and Publicola,* Loeb Classical Library, Harvard University Press. プルタルコス［1996］『プルタルコス英雄伝上』村川堅太郎編、ちくま学芸文庫。

Plutarch [1939] *Plutarch's Moralia,* Vol.6, Loeb Classical Library, Harvard University Press. プルタルコス［2000］『モラリア６』戸塚七郎訳、京都大学学術出版会。

Pullen, J. M. and Parry, Trevor Hughes (ed.) [1997] *T. R. Malthus : The Unpublished Papers in the Collection of Kanto Gakuen University,* Volume 1, Cambridge University Press.

Tacitus [1970] *Tacitus I : Agricola, Germania, Dialogus,* Loeb Classical Library, Harvard University Press. タキトゥス［1996］『ゲルマニア　アグリコラ』國原吉之助訳、ちくま学芸文庫。

Wallace, Robert [1753 (1992)] *A Dissertation on the Numbers of Mankind in antient and modern Times,* Routledge/Thoemmes Press & Kinokuniya.

天羽康夫［2002］「ロバート・ウォーレスとデイヴィド・ヒューム――スコットランド啓蒙における古代近代論争」『高知論叢　社会科学』第73号、293－324ページ。

伊藤貞夫［1982］『古典期アテネの政治と社会』東京大学出版会。

ウィーナー、フィリップ・P.［1990］『西洋思想大事典２』、平凡社。

グレーヴィチ、アーロン［1999］『中世文化のカテゴリー』川端香男里・栗原成郎訳、岩波書店。

坂本達哉［1995］『ヒュームの文明社会』創文社。

田中敏広［1971］『社会科学者としてのヒューム』未来社。

永井義雄［2003］「第二版『人口論』のウェブスター、ウォーレス、フランクリン」永井義雄・柳田芳伸・中澤信彦『マルサス理論の歴史的形成』所収。

橋本比登志［1987］『マルサス研究序説――親子書簡・初版『人口論』を中心として――』嵯峨野書院。

長谷川岳男・樋脇博敏［2004］『古代ローマを知る事典』東京堂出版。

森岡邦泰［2007］「もう一つの『人口論』―マルサスと本多利明―」『マルサス学会年報』第16号。